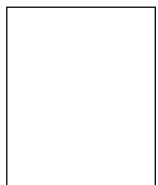


FIND SELECT この一冊

プレゼント：
ご希望の書名を書いてメール
ぼっくすへお便りください。
抽選で今月掲載の4冊の中
からお好きな本を1冊プレゼン
トします。メールにてのご応
募もOKです。

夢に迷う脳

夜ごと心はどこに行く

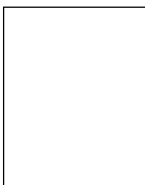


J・アラン・ホ
ブソン著
池谷裕二監訳
／池谷香訳
朝日出版社
定価2,300円+税

著者は睡眠研究の第一人者として有名です。表題の「夢に迷う脳」は抽象的なイメージを与えますが、夢や脳についてのメカニズムを科学的実証的に解き明かしています。夢については、精神疾患の患者の会話や幻覚などとの類似性から、脳の錯乱状態であるという立場から論じます。精神分析では夢を無意識の世界や心の葛藤の表出という見方をしますが、それを真向から否定しているのです。ですから、脳には無意識という状態などなく、意識と非意識しかないと断じます。その立場から睡眠や夢や脳について、臨床的な報告、患者との実体験、脳研究の成果、精神薬などを織り交ぜて、専門的になりがちな内容を非常に理解しやすく書いています。また、著者は本書のテーマは「心脳」問題で、脳と心は同じもので全ては化学物質の変化であるということを力説しています。医師としての誠実な態度が文章に表れ、好感の持てる超お薦めの一冊。

認知症を介護する人のための本

ケアする家族をストレスから救う

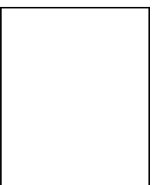


加藤伸司著
河出書房新社
定価1,500円+税

この本は、認知症になった家族のケアをする人に対するケアの本です。認知症の患者さんは珍しくないのに、認知症そのものに対する理解はまだまだです。ケアする人の苦労に対しても理解が及ばず、孤立させていってしまいがち。しかし介護者に限界がきたときにサービスを利用するのでは遅すぎるし、余力をもって介護をしなければ、と著者は言います。嫌いな舅・姑を嫁が、一人暮らしで認知症の親を遠距離に住む子が、若年性認知症の子を親が、などさまざまなケーススタディはどれもありそうな局面です。認知症にかかわる制度や環境はけてよくありません。だからこそ認知症は他人事ではないという認識が社会の中に浸透していかなければならないと、つくづく思いました。来院される患者さんの中には認知症に限らず在宅介護に疲れた方は多いと思います。その方たちへの理解と共感を深めるためにも、是非読んで欲しい一冊です。

噂の拡がり方

ネットワーク科学で世界を読み解く



林幸雄著
化学同人
定価1,400円+税

今や世界人口は66億人を突破して、インターネットは世界中に張りめぐらされています。途方もなく広いと思いがちですが、ネットワーク科学の発展により、実は世界とはごく「小さな世界」であることがわかってきました。わずかに十数人の知人の連鎖をたどるだけで、世界中の誰とでもつながることが証明されたのです。よく「世間は意外と狭い」といいますが、それは実際に根拠のあることなのです。本書では都市伝説などの噂がどのような仕組みで伝播するのか、社会心理学、経済学の経験則を使って解説していきます。またコンピューターウイルスやチェーンメール、SARSやインフルエンザなどの感染拡大、お金の集まり方や格差社会のでき方までも、最新のネットワーク科学で分析します。ネットワーク社会の持つ強靱さと脆弱さは裏表で、それを知る事はテロや感染症から社会を守る事にもつながると実感。今の社会にこそお薦めの一冊。

医療の限界



小松秀樹著
新潮新書
定価700円+税

人間は誰でも必ず死ぬのに、医療に100%の安全を求めるのは何故なのか？そもそも医療は不確実であり、限界があることを受け入れなければなりたない、と著者は力説します。しかも医療に市場原理主義を持ち込もうとして医療制度そのものが危うくなっている一方で、患者は市場原理でしか提供できないサービスを求めていると、厳しく批判します。今の日本人は死生観を失ったのではないかと、著者は現在虎ノ門泌尿器科部長、臨床の現場で医療を担ってきた医師です。ものすごいスピードで崩壊が進んでいる医療と、たがのゆるんだ患者との間で、医療を支えることの困難さがみえます。今や小手先の“改革”ではラチがあかないところまできているのでは？根本的な改革を、歴史の中で考えるということが求められているのでしょうか。医療だけでなくどんな制度を作っていきたいのか？と自問させられた一冊でした。ぜひ一読を。